

## 女格闘家 vs マッチョコンビ

小さいリュックを背負って、彼女は意を決する。

更なる高みを目指すため、武者修行の度に出るのだ。

地元の女子大に通い、サークル活動としても優秀な成績を残し、近所のストリートファイトでもリーダー格の一人となった彼女……キツカ。

いつまでも同じ事をやっていたは……と伸び悩んでいた頃、同じくリーダー格の一人、ライバルの大花（タイカ）が一足早く旅に出たと聞いて、ならば自分も…といってもたってもいられなくなる。

必要以上のものはいらない、と予備の着替えすらほとんど無しに、ライバルのものに似せて作った……道着とスカートを合体させたような、格闘ゲームに出るくノ一あたりのお色気キャラを模したコスプレ衣装風の格好で街を出た。

趣味は逆強盗と強姦魔退治。悪人相手なら何をしてもいい、そんな攻撃的な思考で男を誘い、腕試しついでに犯罪者を懲らしめ、オマケに少し「授業料」を頂く。そうして日銭を稼いでいた。

ただでさえスイカを思わせる、重力に負けない乳房。平均より高めの身長に、スラリと伸びた長い脚。均等の取れたスタイルは、一見して格闘少女にはとても見えない。

自慢の体が、特製道着の柔軟さでより強調される。黒い生地が白く木目細かい肌を引き立て、コントラストで妖しく光って見える程。

そんな姿で裏路地をうろついていれば、すぐに悪漢共がひっかかってくる。ハニートラップにかかった男達は、一人ではもちろん、多少集まった程度では奇襲をかけても傷一つ負わせられるかどうか。

圧倒的な強さで物足りなさを感じつつ、修行初日が終わって日の出を迎えようとしていた。

廃屋の様な人の気配を感じ無い場所を見つける。誰も居ないのを確認し、昼頃まで休もう…けだるい頭で思考をめぐらせていた時。

不意に使われていないだろうライトが一気に輝く。誰かが住んでいたのか、それとも仕掛けか何かか…眼をすばめて白い視界を見つめると、廃屋の中心に居なかったはずの二人が、ボディビルダーよろしくポーズを決めて並んでいる。

「**よく来たな！**」

「なッ……何なのよアンタ達っ!？」

目が慣れ、二人をはっきり捉えたキツカがドン引きして声を上げる。

なんと男達は全裸であった。正確に言うなれば全裸マスクか。それぞれ黒、白の…革だろうか、地味に光沢のあるマスクで頭部全体を覆っている。

ポーズに見合った、筋骨隆々の肉体…そして見た事も無い、異様なまでに大きく膨らんで反り立つ淫部を露わにして隠そうともしない。

なんなのよと問われ、二人は見合った後に息を合わせて黒、白と交互に応える。

「バ〇ハです」「ブ〇ームスです」

「ウソつけえええええ！」

こんな変態が偉大な三大B達と同じ名前の筈がない、と指差して思わずツッコむキツカ。

「ふむう、美人さん、顔が緋くなっているぞ?」「ボディ、見とれちゃいました?」

こちらを無視するような、ギャグマンガから出てきたようなペースで白・黒交互に問い返す。

誰が見とれるかつ！

再びツッコみたくなるが、この手合いには意味をなさないと腹の中で堪える。

「**ここ、アンタ達が住んでたの?だったら悪かったよ、他をあたるから**」

どう見ても人が住んでいるようには見えないが……もしかしたら先客だろうか。

流石に他人の縄張りまで手を出す気は無く、一応非があったことを認めて謝りながら出ようとしたが、あるはずの扉が閉まっている。

「ふふふ、ここを出たくば…」**「オレ達を倒してからにするんだな！」**

黒・白が言うが早いか、

眼を光らせてにじり寄った白マスクが背後から殴りかかる。

殺気に気付いたキツカは、素早く身を翻して低く構える。

「なるほど、そういう事…」

猫を思わせる妖しさと舌舐めずり。

彼らが宿を求めた先客なのか、本当にここに住んでいるのかは分からない。

だが、股間を滾らせて女を襲う理由は一つだろう。

ただのボディビルダーなら相手にするまでもないと思っていたが、向かってくるとなると話は別だ。

拳姫は静かに殺気を込み上げる。

「アンタ達中々ヤルじゃない。変な格好してるクセに」

不意打ちを皮肉って評すると、黒・白がすぐさま返す。

「キミもよく言うな、そんな格好で」「露出狂スかあ?」

「アンタらが言うなっ!」

露出度が高いのはどちらだ、と思わず顔を紅くしてが一っと吼える。

ただでさえこの服は好きで着ているわけではないのに……というのも、美貌、実力、人気、全てでトップだった彼女はいきなり現れたライバル、タイカの持つ同等のステータスに激しいライバル心を抱いていた。「バカな男を誘うため」「好きなキャラのモノマネ」…という建前で、可愛らしくも恥ずかしいオリ

ジナル道着を自然に着こなす彼女を見て、ならば自分も…と、タイカに負けたくない一心のみで似たような服を自作し、着用しているだけだ。そんな事情はお構いなしに、**白・黒**が自らの姿を憚らず口激を続ける。

「さあ来い痴女！」「痴女対マッチョ**かあ……胸熱**」

**「だから痴女じゃないっ！」**

もう我慢せず、思ったままツツコミながら手刀を繰出す。

「フォウッ！」

焦っているのか、余裕なのか。マスクで表情は全く分らないが、眼は見えているらしく、牽制に出した高速手刀を首を振ってかわす白マスク。が、かわした所に合わせて強烈な回し蹴りが放たれる。

**「はあっ！」**

タイカと違い流石に技名は叫ばないが、対抗心と実際に気合が乗るため、怒号するタイプの発勁はできるだけ使うようにしている。

ごおっ、と鈍い音を立てて男の左腕に美脚が刺さる。

ムキムキの体はやはり重い、がその重量をものともせず、男が浮かされる。

「むおおう?!」「がんばれがんばれ〜」

距離を取ると同時に黒マスクの方も睨むが、どうやら手を出してこない模様。間を置き遠巻きに応援している。

完全には意識から消さずとも、体勢を立て直す白マスクに向かって再び電光石火で突っ込む。

**「せえっ！」**

拳が顔に届くか、という時、男の腕が振り上げられる。

寸でブレーキをかけ、バックステップで再度距離を取る。

**「っ…と危ない」**

タイカから感染したゲームキャラのセリフをつい口に出しながら、危うく触れられるところだった両胸を着地反動で**ぶるんぶるん**揺らす。

「あ〜オシ〜」「ぬむう、痴女の癖に避けおって！」

揺れ乳をガン見しつつ、**黒白**が相変わらずのテンションで呻る。

**「だから痴女じゃないっ！」**

変態だけには言われたくない、と歯を向いて叫んだと同時に、男二人が同時に両手を頭の後ろに組み、無毛の脇を見せ付ける様に胸を張る。

「仕方ない、やるか」「イーッス！」

黒の合図に白が返事をする。

何だかんだで勝てないと分かって二体一か。弱い男のやりそうなことだ、と心の中で見下し、不利になる前に白に向かって踏み込もうとした瞬間。

「**スイッチオーン！**」

二人が同時に叫び、更に反り返って胸と股間を強調させる。

何が起ったのか分からない…というか何も起こっていない。大層な連携を少し期待していたのにただの威嚇か、と見下げ果てて、再び回り蹴りがヒットする直前。

『**ずくんっ**』と体が底から熱くなり、**マグマを思わせる奇妙な…でもどこか心地いい**感覚が全身を駆け巡る。

**「っ?！」**

不思議な感覚に声が出せず、力が緩んでしまう。

キレを失くした**左足を**、白男が今度はがっちり両腕で**ギヤッチ**する。

「ゲッチュー！」「ナイッセーブ！」

太い腕に捕まった脚は当然逃れられず、拳で肩の付け根を狙う。

**「離せ、このっ！」**

人体構造のウィークポイントを突いたつもりだったが、全く動じない。急所を鍛えていたのか、それとも自分の体が——？

そう思う間もなく、右腕で足首を固定したのを確認した白変態が左腕で**右脚を素早く掬い取る**。

「そうれい！」

**「しまっ…！」**

もたつく身体では反応しきれず、両足首を抱えられ、地に肩を付けられる。

**急な角度でほとんど逆立ち**になり、**当然ミニスカが捲れて中身を晒して**しまう。

「ほう、**スケスケの黒か**。正に痴女の証！」「レースがたまらんのう！」

**「こらっ、見るな……？ やめろ、撮るなあっ！」**

凝視する二人を睨みつける。スカートと同色でバレないだろうと、**趣味のセクシーな黒レース**をじろじろ見られ……更になんと黒マスクの方は自分の戦利品の**ケータイで撮影**しているではないか！

しかも数多いケータイの中から、**特にカメラ機能に優れる二機**を使い、両手で器用に**静止画と動画**を撮る。

**「やめろっ！おいっ！」**

力の入らない身体で身を振るが、下半身が動かないのではどうしようもない。

マスクの中でいやらしい目つきをしているであろう白マスクが、太い脚をぬっと持ち上げる。

**「なっ……まさか…！」**

悪い予感的中し、重い筋肉を支える足の裏が淫部を覆うように密着する。

**「やめろっ……！」**

抵抗空しく、**張り付いた足**が眼にも止まらぬ動きで、しかし見た目に反して優しく柔らかく、キツカの**股間を高速刺激**する。

『ガガガガガガガッ……』

「やめっあああああ！」

火照った淫唇と淫核を、蟻の門渡りをマッサージされ、思わず仰け反って喘いでしまう。

「フォオオオ！」「デターシロサンノヒッサツ・デンキアンマー！（棒）

ハイテンションで休まず按摩と撮影を続ける二人。

「（何で、こんなに……）ああああんっ！」

子どもじみた屈辱の仕打ちに、完全に牝の啼き声で苦しく叫ぶ拳姫。

足を引っ搔こうと股間に手を伸ばすが、残像が見える動きの足はとても捉えられない。

それでもなんとか爪を立てようともがいていると、ピタリと急にマッサージが停止する。

「タップ（降参）したまえ」

「お、お断りよっ！誰がアンタらなんかつ……んんうう〜〜！」

まさかの降伏勧告を即答で蹴り跳ねるキツカ。紅くなった顔でもキリッと威嚇するが、続けた侮蔑の言葉も終わらぬ内に再び按摩が再開される。

「皆さん見て下さいっ今っ強気な女格闘家がっ電気按摩で感じていますっ」

淫部ズームと引いた全身画を交互に移し、黒マスクが早口で囁きたてる。

「ちょっ、もう映すなっ……感じてな……〜〜〜！」

片手で顔を隠しながら、はっきり叩き付けられる快楽に身が震える。男を楽しませまいと、口をつぐんで甘い声を出さない様にするので精一杯だ。

再び、本当に電気で動いているかのようにビタリと足ピストンが止る。

「タップしたまえ」

またも降参宣言され……力なくされるがままの拳姫が、豹変したように態度を変える。

「わ……分かった……こ、降参……しますう……」

猫撫で声でうっすら笑みを浮かべて敗北宣言。

「シャアアアア！」「降参したあ！強気な女戦士っ電気按摩で陥落う！」

もはや抵抗するそぶりを見せない女に、歓声に沸きつつ近寄る二人。

ロックした腕を外し、下着に手をかけようとしたその瞬間。女がカッと眼を開ける。

シューズがまっすぐ羽ばたき、パンパンに張った種袋越しに巨根の根元を蹴り上げる。

『ゴォキィ！』

「ホアアアアアアア!!」

確信して油断した所に、まさかの急所蹴り。

クリティカルヒットに絶叫し、たまらずのたうち回る。

「アンタらなんかに誰が降参するか！」

「な、なんと惨い……」

素早く立ちあがり、怒涛の剣幕で黒マスクに向かうキツカ。

しかし体中に染み込む甘美さが抜け落ちず、速度が格段に下がった動きでは無傷な男に上手く立ち回れない。

フェイントも混ぜた蹴りでなんとかくつつかないようにするが、あっさりと回り込まれる。

「捕まえましたえ〜」

「くそっ、あっ——」

キレイに背後から乳揉みされ、今度は自慢の胸から甘電流が迸る。

『むにゅむにゅ』と音がしように形を変える巨峰。嫌らしく形を変える柔肉を、いつの間にか瓦礫の上に置かれたケータイカメラに見せ付ける。

「くっ、このっ！あっ！くうっ！」

卑猥に弄ばれ、甘覚に身悶えしながらもなお後頭部や肘で抵抗する。

「いかん、このままでは！アイボオオオ！」

揉みくちやにしながら、予想以上に手強い戦姫につい相方を呼ぶ。

「オウ………大丈夫だ、問題ない」

痛みが引いたのか、白マスクが覇気の無い声で立ちあがる。巨大なペニスも張りが衰えていない。

「あんっ！う、ウツ……なんで……んっ！」

普通の男なら即死してもおかしくない手応えを感じていただけに、数分とかからず回復する男にキツカは眼を丸くする。

男達の人間の限界を越えた強靱な肉体と、弱り切ったキツカの身体……二つの要因があればこそだが、気付く由も無いキツカは快楽と共に絶望で心を埋める。

絶望を怒りに変え、黒マスクに渾身の肘を喰らわそうとするが。

「しゃあっ、も一発行くっス！」

後ろに飛び退り、攻撃をかわしつつまたポーズを取る。

「まさか二度も使わせるとはな…」

白の方もゆっくりと構える。

「まっ、また……！」

自分の身体がおかしくなった原因であろう、謎のポーズ。

催眠術だか何だか分からないが、とにかくこのままではマズい、と横に跳ぼうとしても股間と胸の刺激で身が凍んでしまう。

「スイッチオン！」

無味無臭無色の性欲光線を再び浴びてしまう。

触れられもしないのに体が更に熱くなり、自分が知る限り最大級の肉悦が全身を襲う。

怒りがほぼ全て愉悅に書き換えられ、小さい篝火の抵抗意志ではとても身体が動かせない。

素早く組み伏せられ、再び電気按摩の体勢をさせられてしまう。

「タップしろとはもう言わない」

「や……やめろ……」

手を伸ばし、加速する前に足を退かそうとするが――

『ガガガガガガガッ……』

「やめっ！あああああああああ！」

絶え間なく送り込まれる柔按摩に、一気に桃色の波が押し寄せる。

（いやあっ！男なんかにつ電マなんかにつイカされたくないっ……！）

心の中で必死に拒絶しても、茹だった身体は遂に頂点に達する。

「あああっ！イク……うう……！」

『ぶしっ！ぶしゅっ！』

絶頂宣言し、証拠となる淫水が音を立ててしぶく。

「一度イッた位じゃ安心できぬなあ！」

休まず按摩を続けながら、今度は黒マスクが両胸を揉みしだく。

「おおっマシュマロの柔らかさの中に何やら硬いモノがあるぞお〜？」

道着を肌蹴させ、汗で変色した薄いシャツ越しに両手いっぱい揉み込み、親指と人差し指でしこりを抓む。

「あっ、あっ！そこっ……！」

三カ所同時責めに心だけは負けずにもがき、片手でぶるぶる震える手を掴むが、全く効果が無い。

股間の方では男の足と黒パンが濡り、摩擦で『にちゃにちゃ』と浅ましい音が響く。

「やめ、やめろっ、あっ、あんっ！」

一度イッたばかりだというのに、再び快楽の波が高まってくる。

「さあ皆さん見て下さい、またイキますよ、さあイキますよおおお」「フィイーバァァ！」

より一層刺激を強くし、一気に追い詰める。理性がゴリゴリ削られ、二度目の絶頂に達する。

「ああああ！イクっ……うう……っ！」

『ビクンッ』と魚の様に跳ね、敏感な部分を完全に男に預けて再絶頂。

足で押さえ付けられ、行き場を失う潮水が『ぶしゅぶしゅ』と籠った音を出す。

淫液で水に浸したようになった黒パンの上から、更に足が突き込む。

「ミーの足を汚しおって、くぬっ！くぬっ！」「全国の男性諸君、見てるー？三回目絶頂、は一じまーるよー！」

「あっ、ああっ！も、やめっ、いい加減にいつ！」

もう手選れな股間は諦め、せめて胸だけは守ろうと両手を使い黒マスクを妨害しようとする…が、食い止める筈がまるで縋りつく様に密着する。

自慰ですら経験がない、一晩で二回以上の絶頂。嫌がる心とは裏腹に、体はすっかり未経験の世界にメロメロになっている。

「皆さん、この痴女、自分で揉む手を押さえ付けてきますよ！ほらほらっ！」

本当にそうであるかのように、自分の手首を動かす。重量たつぷりな淫乳がぶつかっては離れ、谷間を作る度に『たぶたぶ』と音がする。

「あっ！あんっ！違うっ！違うっああっ！」

快楽に悶えながらも否定する――それがどれだけ官能的か知らずに、蕩けた顔で足掻くが。

『ガガガガガガガッ……』

抵抗しながらも、それを利用して弄ばれる事に情けなくも牝肉が反応し、更に防御がなくなった股間を一寸も隙無く淫激が続く。

「あっ！あっ！やめろっ！やめろおおっ！」

心の防波堤がまたしても崩れようとしているのか、快楽の涙を浮かべて首を振ってイヤイヤするが。

「全国のみんな、イクよー！さーんにーいーち」GO（ギョ）オオオオオウ！」

三度快楽に身体が弾け、あられもなく果てる。股間からは『ぶしぶし』飛沫を上げ、舌を突き出し堕ちた表情で啼く。

「やめ……っ……っ！イクううう……っ！」

もう按摩刺激は止まったというのに、余韻で『びくんびくん』とのたうつ。

「あっ……くうっ……！」

それでも驚異的な精神力で、何とか痴態を見せまいと声を限界まで押し殺す。

「いやー中々の逸材ですな」「そうですね、お料理のし甲斐があります」

言いながら白マスクが無抵抗の脚を広げ、元々卑しいデザインが淫液に浸って更に妖しくなった黒レースをギュッと細め、割れ目に食い込ませる。

「そおい！」

「はうううんっ！」

為すがまま、与えられる刺激に痙攣するキツカ。演技で屈した時と違い、もはや拳姫の面影はほとんどない。

そのまま細めた黒布をずらし、屈服してますと言わんばかりのヒクつく花卉を丸出しにする。



「フ……最初の一撃、アレが金蹴りなら勝ってたかもしれんのかな！」

実はキツカもあの時に選択肢として考えてはいた……が、醜いものに触れるのを拒む性格と強さへの自身故に手刀を選んだのだ。今となっては裏目に出てしまったが、後悔しても時既に遅し。

「さあ皆さん、お待ちかねの三分間ファッキングの時間です。先生、今回の調理法は？」「至って簡単、レイプでチンぷ！」「なるほど～」言いながら既に亀頭が壺口にぐちゃぐちゃキスしている。

「ふ……ふざけるな……挿れたら、殺す——」

何の意味も無いと分かっているが、両手で胸を鰐る手を握り締めつつ歯を食い縛り、鋭い眼光で最後の抵抗。しかし下の口は突き挿さる巨大な肉剣をすんなり受け入れ、従順に絡み付く。

一気に最奥まで突き上げられ、本来の子宮の位置も変えられる程、深く深く欲棒が侵入する。

『ズブ——！！』

「いやああっ！イックううう——っ！」

侵入時から既に耐えきれない快楽電流が流れ、膣、子宮を通り脳天まで突き抜ける。

肉悦を堪能する暇も無く、按摩を思い出させる高速ピストンで淫壺全体を抉る。

『パンッ！パンッ！パン！パン！』

「あああああっ！あ、アン、タ達いつ！覚えとっ、あふうううん！」

男の腹部が美尻にあたり、乾いた音が響き渡る。

犯されながらも憎まれ口を叩こうとするが、逆に牝声を鳴らしてしまう。

黒が相変わらずのペースで胸を刺激しながら、器用に太剣をマイクのようにキツカの顔に近付ける。

「女戦士さん、チンポレンジのお味はどうですか？」

肉欲に屈した事前提に聞いた質問に眼をギラつかせ、欲棒に咬み付こうとする。

「ウオアブネエ！ナンチューコトシヤガル！まだ逆らう力があるみたいですよ！」

「仕方、ありませんねえ」

言うや否や、キツカの左脚をがばっと持ち上げ、体を横に向かせる。

「あっ、やめえっ！」

文字通り膣肉が抉れる様な感覚に子宮が痺れる。何の負担も無く左半身が動かされ、身体を支配されている事を痛感させられる。

「おおっ体が回転していきます、本当にレンジの中の様です。どんどん熱っぽくなっていきます見て下さいこの牝の顔！」

固定させたカメラに正面向く様に、キツカの頭をクイッと動かす。

「や、やめろっっ、撮るんじゃないい！」

嫌な筈なのに、撮られてますます淫液が噴き零れ、口からはだらしく透明の筋を垂らししている。

「おおっ身が締まっていくぞ！体位か？カメラか？」

ハッキリは聞かず、半端に尋ねて応えさせようとする。

「な、何を言ッ、あっ！もう突くなあああっ！」

思わず達しそうになるが、何とか桃色の波が引くまで耐える。

「さあ、反対側もコンガリ焼くぞ！」

フルスロットルで注挿しながら更にぐるん、と回転させられる。白・黒の変態が素早くキツカの手足を導く。

気付けば両手を突いた、屈辱の——獣の姿勢で犯される。

『パン！パン！パン！パンっ！』

恥辱の極みでありながら…恥辱の極みであるからこそ、潜在意識を引き摺り出され、屈服姿勢で被虐に打ち震える。

腰を突き出す体勢になり、最も深い挿入に子宮がすっかり言いなりになれる。

「あっ！ああああああ——っ！！」

一瞬でも気を抜けば大絶頂を迎えただろう。歓喜の涙と唾液、振り乱した髪で顔をぐちゃぐちゃにしながら何とかギリギリ耐える。

しかし欲まみれの肢体は意志に反し、大剣の突きに合わせて腰を振る。自慢するようにぶら下がった胸を揺らせ、切ない尻肉が男に吸い付く。

「バックがお好みそうですね。また締め付けてきます」「とうとう自分から腰を動かし始めたっまだイカないっまだイカないのかっ！」

弱点体位を発見し、いちいち知らせる凌辱者と既に散々イカせておきながら、まだ絶頂を煽る変態実況。

「イッ！イカないっ……！アンタ達なんか、イッたりしないっ……！」

説得力の欠片も無い顔で、それでも肉体は負けても心だけは譲らず、イキそうになる、イキたくなるのを意地で抑えたが。

「先生、そろそろお時間です」「はい、では仕上げに入ります」

ただでさえ巨大な勃起が、更に一段階膨張する。ピストンの質が変わり、快楽を与えるだけでなく、欲を注ぎ込むために膣内を再調教し始める。

自分の肉の悦ぶさまが刺すように伝わり、何をされるのか本能で理解する。

「やめろっ、やめろおおお！中はっ、それだけはっ！」

愛蜜を噴きながら、肉壺が夢中になって欲棒にしがみ付く。一突き毎、半擦り毎に矜持が崩され、肉屈服への願望が抵抗意志を押し潰す。

「何を言っとるのかね。中出しに非ずんば糞に非ず」「よい子の皆は真似しないでね♪」

『がしっ！』と、腰というより胴あたりを掴み、キツカの体重も利用して限界まで貫く。

「みんな行くぞー！さーんにーいっーちっ！」

「だめ、やめろ、らめらめらめらめ………——っ！」

一瞬、限界まで怒張し、同時に子宮口を喰らわんとぐっさりめり込み、入口を塞ぐ。  
次の瞬間、重厚な砲台からマグマを思わせる灼熱が爆ぜ、牝肉が官能に焼き尽くされる。  
耐えに耐え抜いた分だけ、大きく、深く、強い絶頂で全身全霊が快楽に染まる。  
『ドビュウ!!ビュグゥ!!ドクッドビュウウウウウウウ!!』  
「らめええええ!!中出しイックううううううううううう!!